

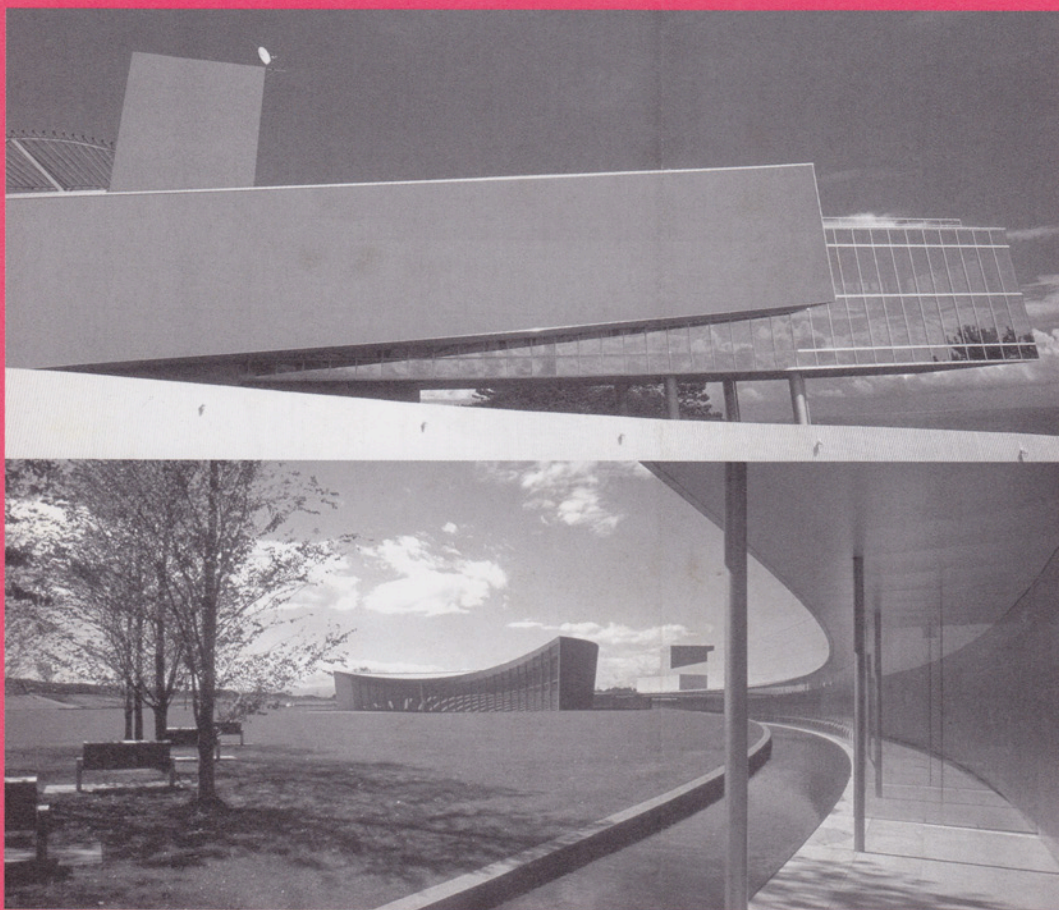
武蔵野美術大学建築学科・日月会

フォルマ・フォロ

Nov.1. 2004

vol.5 第5号

Forma-Foro



目次

フォルマ・フォロ エッセイ
源 愛日児

インタビュー
高橋 晶子・布施 茂

卒業生の素顔
吉村 實

VOICES/
NPOたいとう
歴史都市研究会の活動
中村 文美

製図室/
日干しレンガと
花プロジェクトin立川
塚原 千尋

表紙写真：
左「高知県立坂本龍馬記念館」
1991（設計：ワークステーション）
写真提供：永石秀彦
右「群馬県立館林美術館」2000
（設計：第一工房）
写真提供：新建築写真部

連家ゲームはいかが

源 愛日児 MINAMOTO, Aihiko

武蔵野美術大学教授

今年はゼミ時間の終りに、連歌になぞらえ「連家」と名付けたゲームを楽しんでいる。7～8年前にも同名のゲームを試み、発表者順に次々と家を隣接して設計し、まさに家を連ねたのだが、各設計が自己完結的になりがちで今一つであった。今回はルールを改訂し、第一週案の中で次週に引継がれる要素を寸法(できれば材料も)とともに提案者は指定、第二週はその要素を含んだ家や場構成を参加者全員が提案後、互選により第二週案を決定、第三週は第二週案から第一週案の要素を取除いた差分を要素として取込んだ諸案から第三週案を互選決定、以下同様の手順を繰返すゲームで、敷地や環境も各提案者が決めるものとした。

この新ルールで、前週案と今週案が要素(大きな比重)を共有しつつ、それぞれ別の世界を物語り、次々に変化してゆく中で、連歌により近い姿になった。実際に運用して思う事は、全員が提案する結果、全く違った発想の提案を共感的に見る事が出来、それが面白く、また案に潜む提案者の意識や神経の及びかたに触れるような感覚は「連衆」の気持を味わっているかのようなのである。「あっ」と思わせる空間構造の抽象的な案などが軽々と提示される事もありスリリングでもある。常に既存の要素が前提となるため、現場的にその状況を取込みつつ方向を転ずることも(提出案から変換のアイディアを読解く上でも)面白い。イメージを求心的に作品化するのではなく、即興的に立ち上げる瞬間が連なり、それが他者との広がりの中で進行することの面白さといえようか。まだしばらく実験は続きそうである。

建築学科の新しい風

高橋 晶子・布施 茂

TAKAHASHI, Akiko・FUSE, Shigeru

武蔵野美術大学教授・武蔵野美術大学助教授

今年の3月、竹山実先生、保坂陽一郎先生のお二人が退官され、4月から新しくお二人の先生が就任されました。今回はそのお二人、高橋晶子先生と布施茂先生にインタビューをしました。

最初にお二人の略歴をお話下さい

高橋: 私は1980年に京大を卒業し、大学院は東工大の篠原一男研究室に入り、6年間おりました。篠原先生の停年退官と同時に篠原一男アトリエへ移り約2年いました。その後パートナーでもあり、共同作業でもある高橋寛と1988年にワークステーションを設立し16年になります。実は私は京大を受ける時に私立では唯一ムサビを受験していました。ですからひょっとしたらムサビの学生になっていたかもしれません。大学受験の日のキャンパスの空間体験が新鮮で、いろんな場所を良く憶えています。今回、そこに御縁があって伺えるようになったということで、個人的にはすごく嬉しく思っています。

布施: 1984年にムサビを卒業しました。坂本一成先生がムサビ最後の年で、東工大へ移られるという事で、一緒に東工大へ研究生として行きました。東工大の坂本研究室には1年



間在籍した後、第一工房へ入社しました。第一工房へ行こうと思ったのは、大学2年の時に見た大阪芸術大学の情報センターが印象に強く残っていたからです。以来17年、第一工房に在籍しました。10年目に、担当していた全労済情報センターの現場が終わった時、独立しようと思ったのですが、美術館の設計の話があり、結局、群馬県立館林美術館の設計監理をして、第一工房を退職しました。その後2003年にfuse-atelierを設立しました。

ムサビにいらっしゃることになったいきさつを、お話し下さい。

高橋: ムサビに来るいきさつは昨年6月頃、立花先生から突然電話をいただいた。「教育に興味がありますか?」と聞かれ、始めは何かアンケートかなと思ったのですが、どうもそうでない。それで、お目にかかって、私が事務所を続けるという大前提と、ここでの建築教育とがうまくやっつけられるかどうか、いろいろ話をさせていただき決めました。ただシークレットでということだったので誰とも相談できず、布施さんが来るということも直前まで知りませんでした。

布施: 私は卒業してから約19年ぶりの昨年、建築概論の特別講師で久しぶりにムサビを訪れました。そのあと、高橋さんと同じように電話をいただきました。私は卒業して20年間建築を創り続け、大学で教えることはあまり

考えた事がなかった。ですから突然連絡頂いた時はちょっと戸惑いましたが、母校からの(光栄な)お誘いでしたので、お受けしました。それでは次に、お二人が現在手がけている設計などについて聞かせて下さい。

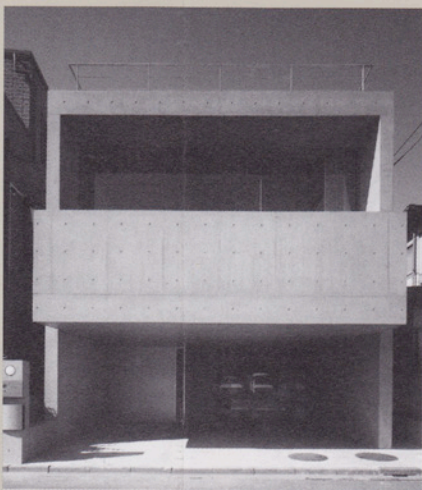
高橋：ワークステーションは当初から高橋寛と2馬力です。事務所の規模が小さい割に戸建住宅の仕事がなくて、今やっているのは、横須賀の衛生試験場という一種の研究所です。それとしのめ東雲の集合住宅のデザイン監修を渡辺真理さん+木下庸子さんのADHとJVを組んでやっています。同じように設計JVで赤羽台の集合住宅の建替の第一ステップを、ADHのお二人+北山恒さん(アーキテクチャーワークショップ)とやっています。今はたまたま集合住宅が多いのですが、ビルディングタイプは固定していません。研究所、学校、健康福祉センター、コミュニティセンター、遡ってゆくと坂本龍馬記念館、あれはミュージアムです。特に特定の施設が多いということはありません。



公共系が多いですね。

高橋：これはキャラクターによるのです。民間とおつき合いする商才がないのです。スタッフは現在4人、テンポラリーに手伝ってくれる人もいます。

布施：第一工房では規模の大きな建築が多かったです。実践女子短大図書館、都立大学体



夏見の家 2004 写真提供：上田 宏

育館、全労済情報センター、群馬県立館林美術館などかなりいろいろな建物を設計してきました。独立後は、住宅を主に設計をしています、独立してから3軒竣工しました。今は現場が4軒。設計があと3件あります。スタッフは4人でやっています。

仕事の概要はお聞きましたが、建築をやる上での気にしているテーマなどありますか？

高橋：(冒頭省略)うまく言えば苦労はないとも言えるのですが・・・。建築があるパターンに固まってしまうのを嫌っています。うまく答えられないのですが、(省略)すごく単純なものをつくりたい。単純というのは素朴というのではなく、どこかをリセットして、次に向かうという単純さと捉えています。建築は不特定の人が使ったり、一人でもいろんなコンディションで接したりする。そこで必ず同じリアクションがあるという場所はおもしろくなくて、別の可能性のためオープンエンドにしておきたい。オープンエンドでできるものは、コミコミとつめ込みすぎでいなくて良い意味での単純さを持っていると思います。

布施：この質問は言うどズレてしまうし、文字にするともっとズレてしまうような気がして言いづらいのですが、私は建築を設計する時に、敷地の特性、空間の分節、プロポーシオン、素材、ディテールなどを強く意識していると思います。そして、シンプルでありながら、つぎからつぎへとシーンが展開するようなシークエンス豊かな建築が私のテーマであるように思います。

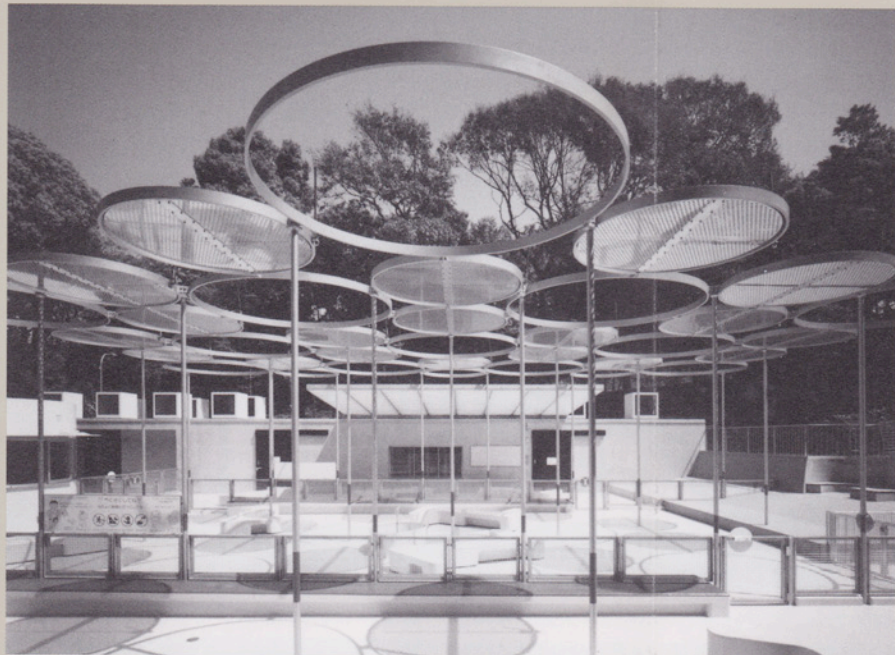
御自分の設計活動と大学での建築教育との間にどういう関係をもたせようと考えていますか。

高橋：学生にとって、建築教育の場が設計の現場であることは理想的だと思うけど、(省略)私の場合、事務所は2馬力(高橋寛氏と共同)で横浜ですから、(省略)ムサビでアトリエを開くことはできないコンディションにあります。どういう状態でやると学生と良いコンディションをつくれるかは、少し様子を見てから考えてみないとわからない。

布施：私は、条件が揃えば大学でも設計をやりたいと思っています。それには大学の時間の問題、それと大学院がもう少し充実すればできるかな、と思っています。私が東工大の坂本研究室に行ったのも坂本先生のもとで設計をしたと思ったからです。東工大だと、研究室がアトリエのようだし、なおかつ教育もそこでうまく廻っている。それが理想かなと思うので是非やりたいと思っています。



夏見の家 2004 写真提供：上田 宏



野毛山動物園ふれあいコーナー 2002 写真提供：ワークステーション

ムサビに来てから思いもよらなかったことがありますか。

高橋：まだそういう活動をしてないこともあります。研究室活動の骨幹になる人が見えない。大学院生がこんなに少なかったのか。もう少し層が厚いのかなと思っていたら、それほどでもない。4年のゼミでも、ワングループとしては認識できない、人数も多いし。中には注目したい人、頑張っている人はいるのだけれど、その人達とだけコンタクトしていれば良いとは思えないし・・・今は少し困惑しているような状態です。

高橋さんが思っていたゼミはどんなイメージでしたか？

高橋：ゼミはもっと人数が少ないと思っていました。現実には希望する人は皆来られるので、ゼミの人数が片寄っている。かわりに、全然出てこない人もいます。そういう人達は無

視しているのだけど、最後に泣きつかれるといやだなあと思うし、そういうネガティブな学生との付き合いを意識せざるを得ない状況は、決して良いことではない。私は面倒見が良いタイプではないし、2~3ヶ月たって、まずは課題が浮上してきています。

布施：学生もいろいろなタイプがいますし、学年によっても違う。私は卒業して20年間で空白で、その間の学生の変容の過程を見ていない。まだ来て2~3ヶ月なので、コメントする程見ていない。ともかく1年通して見てからと思っています。ただ、専任が内定してから今年の建築祭を見たのですが、卒制はちょっと物足りなかった。私の記憶だと昔はもう少し力が入っていたように思います。

ムサビの学生は如何ですか。また他の大学の学生と比較してどうでしょうか？

高橋：今私は2年生をメインに教えているの

ですが、2年生は素直だと思います。だから私も元気になる。建築の学生は難解な文章を読んだり、話したりすることで、その理屈そのものを消化することだけじゃなくエンジンにしている、エネルギーにしている部分が多々あると思います。社会批判的なスタンスをとってゆくことで、デザインを考える。そういう意識無しに（省略）設計していても、長期間自分がやってゆくものに対する責任がない、と私は思っています。手を動かしながら思考力がどんどんついていって欲しい。3、4年になった時、そんな風になってくれたらと、期待半分、不安半分です。他大学との比較では、ムサビの学生は、かわいがられている、かわいがられすぎかとも思います。先生方はきちんと相談に乗って下さり、学生もそれが普通と思っている。例えばN大学などは、学生が多くてイモ洗い状態だからどうしても丁寧に対応してもらえない。そういう環境をバネにして体力をつける。ムサビの学生はもう少し、しぶとくなくてもよいかと思います。その点布施さんはシブとい。

建築家になろうとする若い人達に一言。

高橋：社会に出たら、もう競争相手なのですね。こいつはやるな、負けたくないとか・・・そういう風に思えるような人になって欲しい。いいライバルになってほしい。

布施：真直ぐ建築の設計に進む人がもう少しいてもいいかなと思う。本当に建築が好きの人に建築家になって欲しいと思います。そうでなければ、続けるのは難しいと思います。

今日は長い間ありがとうございました。

NPOたいとう歴史都市研究会の活動

中村 文美 NAKAMURA, Fumi

32回生 東京芸術大学大学院

保存修復建造物研究室 非常勤助手



市田邸の門から建物を見る

2001年春、上野桜木で10年間空家となっていた築100年ほどの家「市田邸」に、仲間と4人で住み始めた。明治40年頃、日本橋の布問屋が建てた小規模屋敷型住宅である。必要最低限の補修を大工さんにしてもらい、自分達で家中50枚以上の障子紙をはりかえ、大掃除を行った。賃借にあたり、個人で借りるよりも台東区界隈の歴史文化を調査し、地域に還元できる団体をつくろうと「たいとう歴史都市研究会」を立ち上げた。

ムサビ卒業後、伝統建築の修理技術を学びたいと再び学生になった。研究室では、建造物の保存修復に関する制度、法規、修理手法、伝統技法などを、古建築の実測や修復現場の演習を通して学んだ。そもそも、文化財って何なのか、残したいという気持ちは何なのか、多くの疑問があった。第一、古い家がいいな

んて言いながら、自分はそのような家に住んだことがないどころか、北海道生まれの私は、高気密高断熱の家で育ってきた。しかし、少なからず風土と共にある暮らしをしてきたと思う。上京してマンション1人暮らし…今の家に住むまでは、季節感の少ない物足りなさを感じていた。

今の家は、エアコンも網戸もなければ、白蟻と鼠とゴキブリとたたかう日々である。でもなぜか豊かさを感じる。顔中蚊にさされながら草むしり、障子と雨戸の開け閉め、掘りごたつの茶の間での食事、出入りの大工さんに家に来ていただき、座敷で茶道を習う。泥臭い生活を都心で始めて3年半。こんな自然との付き合い方もあるのだと嬉しくなり、上京して10年目にしてやっと、東京暮らしも悪くないかなと思いつけている。

関東大震災、戦中戦後…この家には沢山のエピソードとシミとキシミがある。自分が住む家に、前にどんな人が住み、どんな生活をしていたのかなんて、そんな記憶はできれば消したいと思うのが当然だと思っていた。でも、今の自分以上にこの家に愛着をもち、毎日磨いてきた方の話を聞き、日記や写真を見ると、なんとも言えない緊張と安心を感じる。隅々まで家の構造を覗いているので不安



住人と2階下屋のサビ止め塗り



小学生が町歩き途中に市田邸でひと休み

はないが、現行法規ではありえない壁のない開放的な座敷、これぞ住みごたえである。

たいとう歴史都市研究会は、昨年末、なんとかNPO法人化を行った。現在は、大学との共同研究や、助成金で、調査や勉強会などの活動をしている。最近では、建物所有者が「残したいけれど方法がわからない」という相談に、構造診断、現況調査、修理活用提案を行うようになった。市田邸も、住むだけではなく、8畳×2部屋ある座敷を地域の文化活動の場として月1回程度でイベントを行っている。

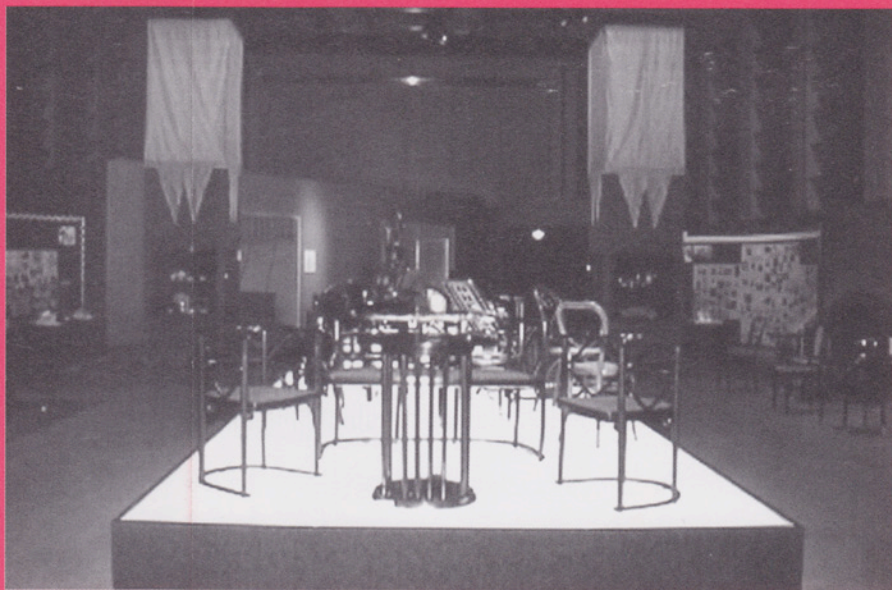
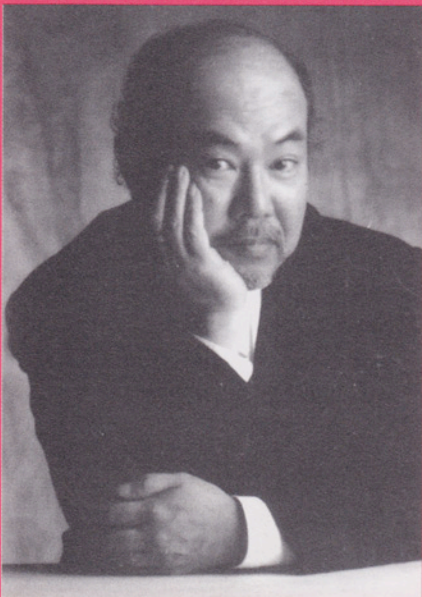
既存のものを残すか、破棄するか、選ぶ行為自体も生活上のデザインであれば、先代が残した技術を読み解き建物の魅力を生かした修理方針をきめ、現代の用途にあわせていくことも建築における創造力であることを実感している。

古往今来

吉村 實 YOSHIMURA Minoru

3回生 設計工房A R S.

父がゼネコンの建築技術士で、また祖父の代まで棟梁の家系であったから建築の道に進むことになにも躊躇はなかったが、設計の専門として製図板にしがみつ়くことを希望していた。そのため工学系ではなく美術系で勉強したくとも芸大の壁は厚く、まだ卒業生を出していなかったムサビに辛うじて拾ってもらえた。当時武蔵野の台地の芝生にプレファブ小屋の建ったキャンパスにはのんびりムードが溢れていた。周りの学生は皆絵が旨くコンプレックスをいだかされたものだった。絵が下手でも設計ができるため、皆に先んじることとは何かと意識して、自分の授業をさぼって上の学年の講習会にも出来るだけ参加し、多くの優しい先輩方からいろいろ教示を受けた。



トーネットとウィーンデザイン展 1996

また、竹山、岩淵、保坂、磯崎等先生方も若く、製図室にこだわらず芝生の上での授業、学園紛争のため学外でのミーティングや、アルバイトを通して、設計術ではなく経験談や設計に関わる一般常識など<建築>の魅力を直接聞くことができたのも今では財産である。

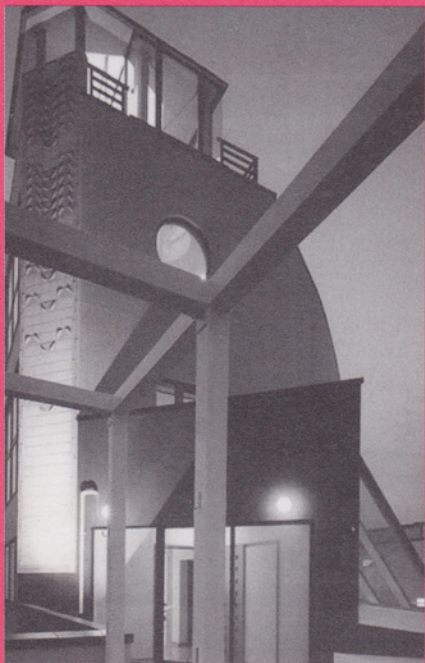
学部卒業後、芸大大学院の壁がまたしても厚く、寺田先生に報告に伺った折り、行くところがなければと副手にと、残していただいた。副手時代、建築の研究室ではなく商デ、工デの研究室や工房、アトリエに出かけ知己を得、また実際にモノを作っている様を目の当たりにした。社会にでて、村田眞一君の紹介で相田武文+故木島安史、渡辺武信氏のそれぞれの事務所実務を覚えたが、その事務所にはスペース30の関係でムサビに着任される前の長谷川堯氏や早大、芝浦工大や他大のアルバイトが多く集まり、大きく刺激を受けた。PL学園幼稚園や青木診療所等の担当の中で、インテリア・家具等全般にわたって責

任を持たされたことは、興味があったとはいえ美術系出身故に任されたと思っている。

大阪万博以降建築技術の進展はめざましく、予感として、モダンの「規格化」はコンピュータを発達させ、設計者の立場の問い直しがあると考え、本来の建築家の職能とは？と個人的に歴史の遡行をはじめた。モダンデザイン＝バウハウス以前を知りたくなっただけである。最初の海外旅行では現代建築は教科書の確認でしかなく、感激したのは欧州の圧倒的な時間の蓄積から生まれた建築だった。好きだったハンス・ホラインを生み出したウィーンには格別なものを感じ、当時少なかった資料を求めて古本屋に出かけ、少しずつ勉強を始めた。いろいろ魅力はあるものの、その一つに建築が「工芸」の世界であったことである。規格化＝工業化以前のいわばモックが全てという時代が、作り手の顔を感じることが出来るように思われた。作り手の責任といってもいいが、組織だと責任者の顔が見

えにくくなることへの異和感を感じて、自分で全て検分できるスケールの仕事をしようと徐々に思い始めた。それは設計作業が縦割れしつつある中で再度横断的に考えようということだった。意味を変えつつあった建築ではなく、本来のあるべき建築を個人的には環境と読み替えるようにした。私の設計指針として生活美学の構築を目論み居住環境をフィールドにして今日に至っている。この動機の原因風景に副手時代があることは否めない。

建築を総合芸術作品と呼び変えたO・ワグナー、J・ホフマン、ウィーン工房等の魅力を語るとき、環境は適語だ。自分のデザインソースとしてウィーン・ユーゲントシュテルを研究し、環境として生活空間を語り始めたとき、ふたつの大きな機会があった。ひとつはムサビID出身で造形大助教授故大熊喜光氏との出会いで、職場空間のインテリア化を一緒に考えないかとプラス棟のオフィス環境



Turm-Haus 1995



J-Haus 1999

研究所(1983)に参加し、当時レイアウトとしか呼ばれていなかった分野が今日快適職場環境としてデザインマーケットになった、その先駆けのお手伝いをした。またふたつ目は関東学院大学の講師(1983-2003)に呼ばれたことだ。4年目の1987年に、建築学科の中に環境デザインクラスが設けられ、文系でも入学が出来、少人数で、従来の工学的カリキュラムではなく広汎なデザインをやるとういう大学側の意図があった。設計演習を担当し、学生時代を思い出しつつ、ひたすら横断的に空間を考えてもらうようにし、自分の意図する建築を若い世代に伝えるようにした。

こうして振り返ってみるとムサビ出身であるが故に工学系とは違ったアプローチで建築に参加していることを実感している。どうやら多くの種はムサビ時代に蒔かれたようだ。建築は時代とともに変化はあっても、その本質は変わらないものと教えられ、それに向かう姿勢は紆余曲折あったものの、余り変わらずやってきたように思う。大学教育もまた規格化されつつある現在、ムサビは他大学とは違った変わらない芽を大事にして学生を育ててほしいものだ。

同級生の眼

村田 眞一 MURATA, Shin-ichi

3回生 一級建築士事務所アルカディア

彼とは住まいが東横線沿線のせいで、大学時代から現在に至るまで友人として交流を深めている。在学中は本人の思いと裏腹かもしれないが、建築に対して真面目で熱心な学生であったことは否めない。それは卒業設計で金賞を受賞したことでも明らかだ。

それ故、ある意味で良識的で学生らしい破天荒さが無いのが、僕にとって若干の不満ではあった。時を同じくして彼が建築設計の実務を通してウィーン工房に傾倒し、今でも「建築のあるべき形」を探求している姿は魅力的である。近代ヨーロッパの礎となった市民都市・ウィーンをその美しさだけでなく、その背後にある歴史や文化、市民生活と言ったものを考察理解し、彼の言葉の「環境」という概念を多様な生活空間を軸として構築しつつある。しかし、現代日本の生活空間は経済効率を価値の中心に据えた大規模開発の高層住居がばっこし、その建設費は自衛隊が装備する最新鋭の一人乗りの戦闘機一台にも満たないものも多い。そこでは、作り手のプライドや責任、ヒューマン・スケール、生活空間の充実や美意識と言った彼の目指す建築の基本＝「環境」はなく、多くの都市の視界から彼の言う「環境」が消えようとしている。

二十一世紀になり再び「建築とは何か」という原点に立ち戻ろうとした時、彼の言う「環境」の意味は重い。しかし、一朝一夕にはそこに立ち戻れない現在、僕も含め大学の建築教育のジレンマも続く。

日干しレンガと 花プロジェクトin立川

塚原 千尋 TSUKAHARA,Chihiro
武蔵野美術大学4年

中央線沿線でこのところ開発がめざましく進んでいる立川。その立川市砂川中央地区のまちづくり推進協議会（以下まち協）の活動に参加しないかと環境計画の三浦先生からお話があったのは、昨年の秋でした。具体的な内容としてはまちづくり活動をアピールするための看板をデザインしてみないかというものでした。

その看板の設置場所と指定されたのは、五日市街道沿いでマンション脇の約10㎡程度の小さな空き地です。さて、その場所にどんな看板を立てたらよいものか、当初からこの活動に関わっていた先輩の藤田さんとすっかり頭を抱えてしまいました。「この場所に私たちが看板を設置することで、本当にまち協の活動をアピールできるのだろうか」といった疑問が沸き上がり、看板に代わるなにかもっと良いアイデアはないものかと再考することにしました。そして考えついたのが地域の人たちと共につくる「日干しレンガと花プロジェクト」です。

まち協の活動をアピールするものは、文字を書いた看板だけではないはず。看



子供達のワークショップ

板が文字や写真を媒体としたプロバガンダだとすると、私たちが提案したものは植物、花を育てるといふ実際の行為を媒体としたものといえるでしょう。敷地で花を育て、育った花を周辺の学校や公共の施設に配ろうと言うわけです。ところが敷地はそのままでとても植物を植えられる状態ではありませんでした。まずは敷地を整えないとなりません。そのために私たちが考案したのは地元の土とけやきの落ち葉を使用した日干しレンガでした。それを使って花壇をつくり、花の種を蒔くといった5回にわたるワークショップをとおしてこのプロジェクトは進められました。

わたしがこのプロジェクトに1年間ほど関わって学んだことは、「住民参加によるまちづくり」の難しさです。行政機関が「住民参加」をうたって公共建築物の計画を進めたとしても、住民の意見というのは千差万別、実に多様です。これをいったいどうやって、誰がまとめるのでしょうか。結局は設計者や行政機関といったブラックボックスに詰め込んで、最後に出来上がったものには住民の意見が本当に反映されているのでしょうか。こういった「住民参加」は本当の住民が参加した景観づくりと言えるのでしょうか？

自分の手で自分の生活の場である街を作っているのだ、という実感をもてるそんな「住民参加」のやり方を行政機関は進めてほしいと思います。私たちがプロセスを重視するよりよい方法を探りながら、さまざまなアイデアを提案していかなければならないと思っています。

◎ロジカルに、あるいは手仕事の。今年着任された高橋晶子、布施茂両氏の建築的アプローチは対照的である。◎ここ数年、建築学科ではオープンキャンパスや建築祭にあわせて、学生作品の公開合同講評会を行っている。担当以外の教官や、ゲストクリティックなどから様々な意見が飛び交い、学生にとっては刺激的な舞台だ。◎高橋氏の友達のような、しかし超卒口のアドバイス。言葉少なに、空間の隅々まで見通したような布施氏のコメント。現在活躍中の建築家であるおふたりを心より歓迎し、是非とも建築学科に新しい風と光を導き入れて頂きたいと思う。(M.H.) ◎昨年度まで、年明けの1月におこなっていた建築学科の「建築祭」が、今年度から3月の初旬になるという話を聞きました。場所も鷹の台を離れ、武蔵野美術大学「新宿サテライト」(新宿センタービル9階)となるようです。こうした変更に伴い、内容も変わることが予想されます。毎年恒例となっていた「日月会建築賞」「OBギャラリー」も多少かたちを変えるかもしれません。今後、研究室とも協議し、詳細が決まり次第、ホームページ上で皆様にお知らせいたします。実施の折は、御協力の程を宜しくお願いいたします。(K.S.)

フォルマ・フォロ
Vol.5 2004.11.1

編集：林 美樹、須藤和由、青山恭之、栢田祥仁
デザインフォーマット：矢萩喜從郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
<http://www.nichigetsu.org>
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内